波多野宗教哲学とその方法論の展開

芦名　定道

＜内容＞

１．はじめに――問題
２．波多野宗教哲学の形成と展開
３．方法論から見た波多野宗教哲学
４．むすび――展望

１．はじめに――――問題

（1）波多野精一へのアプローチ

１．「日本・アジアのキリスト教」演習

・日本キリスト教思想研究、近代日本とキリスト教思想との相互連関を中心に
矢内原忠雄（2001 年度）、内村鑑三（2002 年度）、海老名弾正（2003 年度）
植村・海老名のキリスト論論争（2004 年度）、植村正久（2005 ～ 2007 年度・前期）、
高倉徳太郎（2007 年度後期）、波多野精一（2008 年度～）

２．波多野（1877 ～ 1950）の主要著作（演習で扱ったものを中心に）

「フィッシャー氏のカント」（全集５，1900）
『西洋哲学史要』（１，1901）
『基督教の起源』（２，1908）
「スピノザ研究」（１，大学院卒業論文、1910）
「カントの宗教哲学について」（５，1913）
カント『実践理性批判』翻訳（1918）
「宗教哲学の本質及其根本問題」（３，1920）
『西洋宗教思想史、希臘の巻第一』(３，1921)
「宗教学」（３，1922）
「歴史の意義に関して――ギリシア思想とヘブライ思想と」（５，1922）
「プロティノスとカント――宗教哲学の二つの任務」（５，1925）
『宗教哲学』(４，1935)
『宗教哲学序論』（３，1940）
『時と永遠』(４，1943)

（2）伝記的事項（『キリスト教人名辞典』日本基督教団出版局、より）

波多野精一（1877.7.21 ～ 1950.1.17、明治 10 ～昭和 25）
宗教哲学者、長野県（松本町）に生まれる。
第 1 高等学校から東京帝国大学文科大学哲学科へ、大学院で R.ケーベルに学ぶ。1900 年、東京専門学校（現在の早稲田大学）講師となり、西洋哲学史を講義。04 年より、ベルリン、ハイデルベルク大学に学び、ハルナック、ヴィンデルバンドらに師事。帰国後、東京帝国大学で原始キリスト教を講義。1917 年京都帝国大学教授となり宗教学講座を担当。47 年に玉川学園大学教授に招聘。

２．波多野宗教哲学の形成と展開

＜ポイント＞

１．波多野宗教哲学の前提

西洋哲学史研究＋近代聖書学　→　西洋哲学史研究者、経験の哲学

古代ギリシャと近代哲学（カント）

宗教経験という基盤にふさわしい哲学

２．20 世紀の宗教学（神学、宗教哲学、現代宗教学）の動向

宗教学者：現代宗教学の成果を正当に評価、しかし実証主義的傾向に対しては批判

３．波多野の方法論とカント哲学

批判哲学とそれ以降、新カント学派とトレルチ

フッサール・シェーラー・ハイデッガー、バルト・ブルンナー

４．波多野宗教哲学の基本プログラムとしての「宗教哲学の本質及其根本問題」（1920）

「宗教哲学の本質及其根本問題」（1920）と『宗教哲学序論』（1940）を比較する。

（1）1910 年代まで

1．『西洋哲学史要』（1901）――西洋哲学史研究者としての波多野

・近代ドイツの哲学史研究に依拠

・アリストテレスとカントを軸に哲学史を構想

古代／中世／近世（カント以前とカント以降→）

・哲学史をまとまったマクロな動向において捉える。そのまとまりの中で、個々の哲学家の思想的特徴を示し、体系的な説明へ進む。

「ライプニッツ」「彼はデカルト及びスピノーザと同じく実体は何ぞとの問題を発しぬ。以為らく。デカルトは実体を自存するものとなししかば、其の論理的帰結としてついにスピノーザの万有神教を産み、神は自然、即ち意志も智力もなき盲力、に同じとせらるるに至りぬ」（219）

2．『基督教の起源』（1908）

A．近代聖書学とキリスト教思想

・近代聖書学の成果に立って、聖書を思想的に積極的に読む可能性の問題

・資料批判とその基準

積極的な資料評価／経験と宗教的想像力の論理、現在の解釈者の経験

古い伝承がどのように変化すると考えるのが合理的か

・体験と心的状態　→　類推（同質性）

(1) 近代聖書学―歴史的文献としての聖書―

(2) 伝承史、体験・宗教的想像力の論理

(3) イエスの宗教、あるいは自己意識

「イエスは決して新しき宗教を開こうとはしなかった」（50）

「イエスは自らメシヤと確信した」「この自信この自覚」（63）

「イエスは超人的意識を有した」（64）、「イエスの宗教的意識」（95）

(4) 直弟子とその体験

(5) パウロ

「回心」、「この経験に先だてるパウロの心的状態を究めねばならぬ」（122）、「パウロ自身の深き経験」「おのが心の底に感じ不調和を覚えた」「彼の回心はこの矛盾の解決に外ならぬ」（125）

「こはかれの宗教的経験に基礎を有し、そを概念的に秩序的に言顕はし更に思索を加へたものに外ならぬ」（142）

「彼は死したイエス・キリストを直接に経験した」（152）
「彼は真に復活したクリストと共に己も復活したを経験したのである。さて彼はこの経験より遡ってクリストの死を解釈した」（162）、「われはクリストと共に死し共に生く。この深き神秘的経験こそパウロの救ひの説の真髄である」（163）、「経験した。これ彼の新しき義の説の起源である」「彼の深き宗教的経験の真髄を言顕はしたものであった」（164）、

Ｂ．伝統の展開過程
・連続性と非連続性、歴史的思想史的文脈における
　　ユダヤ教／イエス／直弟子／パウロ：民族宗教から世界宗教へ
　　可能性→現実性、否定を介した弁証法的展開
「この贖罪論は今日しばしば人の非難を受くるのみならず、パウロとイエスとの相違点の一つに数へられる」（156）、「パウロの贖罪論は既に直弟子等の信仰によって準備せられた」（158）、「時代思想の形式は勿論、福音の中心を神の国よりクリストに移したことも、彼に於てに非ず。既に直弟子達に於てはじまったのである」（175）

（２）「宗教哲学の本質及其根本問題」（1920）――波多野宗教哲学の原型・原構想
１．「生命活動の深き省察」「学的研究の鋭き反省」　→　生命と学問
２．内容　「第一章　宗教の学的研究において宗教哲学の占むる位置」（175-192）
　　「第二章　宗教哲学の諸の立場　批判哲学の特質」（192-204）
　　「第三章　宗教の本質」（205-217）
　　「第四章　宗教哲学の諸問題　特に神の観念」（217-232）
　　「第五章　宗教哲学の諸問題　特に救済の観念」（232-242）

３．広義の宗教学と現代宗教学
「宗教学と言えば、表面では宗教を学的、方法的に探究することを意味するが、裏面には特別な含意をもっているのである」、「一定特殊の歴史的宗教の立場から宗教を研究する神学」、「世界及び人間の一般的考察より得たる普遍的原理をもって宗教を理解せんとする哲学、これら二者から区別される新しい学として、宗教学は成立した。宗教学は神学の偏狭と附会とを去り、哲学の思弁と空想とを棄てて、公平に、著実に、経験的に、科学的に宗教を研究することを主張する」（175）
４．神学から宗教哲学、そして宗教学
「宗教と言えば己の信ずる特定の宗教を意味する。それ故に種々の宗教を包摂する一般概念としての宗教なる語は、彼らの意識に現れようもなかった」、「神学が彼らにおける宗教の唯一の学的研究であった」、「中世の末期から」「宗教という普遍的概念が次第に鮮やかに彼らの学問的意識に上って来た」、「一定の特殊宗教の立場を理論的前提とせず、世界及び人生の一般的研究に立脚して宗教を考察せんとする傾向が著しくなった。即ち宗教哲学の名の下に理解されてきたところのものがそれである」（176）
５．現代宗教学と実証主義
「宗教学が」「過去の多くの宗教哲学的体系の陥った迷妄を指摘し、非難することは正当である。ただしながらそのことは、宗教の一切の哲学的考察を拒否することであったはならない。ありし宗教哲学に向かっての非難は、あるべき宗教哲学に対する排斥を意味してはならないのである」、「一切の哲学的態度の排斥は、それ自身一つの哲学的立場に立つことを意味する」（177）
６．実証主義批判
「実証主義が結局は宗教の否認に終わりはしないかを恐れる」、「実証主義に従えば、在

るものはただ事実のみ」、「宗教の最も根本的な特色はそれの超越的傾向に存在する」、「現実の世界を遙かに超えて」「宗教は必然的に理想主義に立脚する」、「現実主義を出で得ぬ実証主義が」（178）「それを否認し排斥し、進んでは自らそれに代ろうとするのは、余りに理の当然なこと」、「宗教はもはや無用の長物である。寧ろそれは迷妄であり、誤謬である」、「かかる予想をもって臨むとき、宗教哲学はむろん存在し得ないに相違ない」（179）
「実証主義は経験的事実の尊重主張しながら、陰に一定の哲学的立場に立って、事実に暴力を加えるものではないか。それは宗教の研究に先立って、既に宗教について定説を抱くものである。要するに実証主義は独断論である。」（179）

７．宗教哲学の可能性

「何よりも第一にこの事実を尊重しなければならない。そのことは」「宗教哲学を排斥するという偏見を除き、宗教の哲学的考察の可能の余地を承認することとなるであろう」、「宗教哲学の可能性」

８．宗教哲学、宗教の特殊性・歴史性、宗教史学

「宗教という語は普遍的称呼に属する」が、「現実に存在する宗教、人々に力と慰めとを与える生ける宗教」「事実存在するは特殊宗教である」（180）
「共通なる本質を明らかにせんとするは、彼らの権利であり、また義務でもあろう」、「しかしながら、嘗て十八世紀の学者がなしたように、かかる反省の産物を唯一の真の宗教と認め、歴史において存在する特殊宗教を閑却し、排斥するということは恐るべき迷誤である」「芸術論が芸術でないように宗教論は宗教ではない」、「具体的、個性的宗教の具体的、個性的なる変化発展の跡を、ありのままに認識せんとするのが、宗教史である」、「それは、宗教の学的研究の出発点はであり、また基礎である」（181）

９．歴史とは（新カント学派、あるいはトレルチ）→宗教史学と（宗教）哲学

「十九世紀」「歴史の研究において驚くべき進歩を遂げた」（181）、「西南学派」「ヴィンデルバンド」「リッケルト」「歴史学と自然科学との差違を明瞭にした」、「大体の傾向と主張とには同意せねばならない」（182）
「**第一**、歴史の世界は個体の世界である」「歴史の任務は」「一回的なもの、繰り返されざるもの、個性を把捉し、記述するにある」（182）
「**第二**、歴史の世界は価値の世界である」、「認識は」「模写ではない」「選択を意味する」、「歴史においても認識は選択を意味する。ところが歴史が一つの学として客観性を要求するものである以上、それの選択の原理、識別の標準は、必ず普遍妥当性を有するものでなければなならぬ」、「普遍的文化価値とよばれておる普遍妥当的価値」「歴史学はこのような価値に関係せしめて事実を選択し、理解しようとする」（183）
「価値に関係せしめるとは」「価値判断する」「価値意識によって経験的事実を評価する」「歴史学とは具体的な個性を具えた現実を、一定の普遍妥当的価値の実現の過程として理解し認識するところの学である」、「歴史の終極の規範なる普遍妥当的価値は、歴史の予想であって問題ではない」、「従って宗教史の予想するところのものを意識的に問題として論究する必要」「そして宗教哲学は」「この任務に当たるものである」（184）

１０．神学（組織神学）と宗教哲学

「特殊宗教の研究の第二の部門」「神学」（184）、「一定の特殊宗教の真理性を承認する立場よりその宗教を研究する。それの研究は特定の宗教に対する生きた体験を予想しなければならない」「その宗教及び宗教団体の実際上の生活と事業とに貢献しようとする」「宗教の生と学との総合」
「組織神学の任務は一定の宗教において真理と認められる生内容を概念的体系的に論述するにある」（185）
「宗教以外の方面から借りて来た原理によって宗教の本質を論ずるということは、避けね

ばならぬ誤謬である」「事実を尊重し、事実を出発点もしくは基礎としなければならない」、「このことは、単に事実のみ着目し、あらゆる事実に共通なるもの即ち事実的普遍者を捉えこれを本質と見なすことを意味しない」（186）、「それは事実からの概括ではなく、却って事実批判の規範」、「一つの目的論的概念である」

「組織神学は一定の宗教の真理内容を肯定し、これを体系的に論述するの任務を有する」「それは本質を」「永遠の相の下に観なければならない」、「一定の宗教の真理内容の論究に当たって可能なる時の全体を含めて考察しなければならない」、「過去の事実の批判の標準であるばかりでなく、またその宗教の将来の発展の全体に対して、その真精神、原動力、実現せられるべき目的という意味をものべきである」（188）、「本質は」「一歩を進めて意志に対する目的もしくは理想となる」、「にそれは、可能なる時の全体に亘って、特定の宗教の具体的、個性的なる本質を肯定し、主張するものとなるわけである」

「組織神学は一定の特殊宗教の具体的、個性的なる生内容を承認し、主張する」、「行為もしくは生に属する」「私たちはそれを確信または信仰の名を以て呼んでいる」、「しかしながら、盲信ではなく理性に基づくもの」「であることを主張する以上、」「私たちは」「宗教的真理の普遍妥当性の根源に至られねばならないのである」、「すべての個体を超えて、あらゆる歴史的宗教に当てはまる宗教一般の本質を考察せねばならぬ」（189）、「宗教哲学こそ真に永遠の相の下に宗教の本質を観念する」（190）

１１．宗教心理学

「宗教の一般的研究は必ずしも哲学たるを要しないのではないか」、「十九世紀以来勃興し来ったの経験主義的傾向は、人々に宗教一般の経験的研究を促した」「個人の心的経験」「社会における生活様式」「内的生活及び外的現象」（190）

「例えばジェームズがなした如く」（191）

「私たちの学的良心は、何が宗教をして宗教たらしむるか、宗教の価値内容とは何かとの問題の解決を私たちに迫るのである。即ち宗教心理学は必然的に宗教性の規範の問題を予想する。そしてこの問題の解決の責を負うものは実に宗教哲学である」（192）

１２．宗教哲学が依拠すべき哲学とは、批判哲学

「あらゆる宗教研究についての根本的な反省は、すべて必然的に私たちを宗教哲学へまで導いた」「完成者としての哲学を要求する」、「しかしながら哲学は、万人が等しく承認し研究せるものが、ただ一つ存在するのではない」（192）、「いかなる哲学的見地に立ち、いかなる主義を奉じ、いかなる考え方に従うべきかに関して、あらかじめ私たちの態度を決定しておかねばならない」、「カントによって創出された批判主義」

１３．誤れる宗教哲学としての主理主義的形而上学と超自然主義

「批判哲学以前に専ら行われた宗教哲学上の二つの傾向」「一は主理主義的形而上学」「他は超自然主義」（193）

「主理主義的形而上学」「理論的認識によって実在の根本原理、真の実在、絶対的実在を把捉し得るとする点」「真の実在は宗教の対象たる神と同一視せられる」「宗教哲学の任務は、このような絶対的実在の本性及特質を究明するにある」（193）、「神の存在の証明ということは、宗教哲学の最重要な仕事となる」

「**第一**、認識論的考察は、私たちに主理主義的形而上学の存在の権利を否定すべきことを教える」、「倫理的意識が経験界を超越して樹てる概念や原理は、存在の世界に対しては当為（Sollen）の意味を有する規範（Norm）である。それらは経験を支配し、整理し、統一し、理論化せんとする思惟の要求の産物であって、実在の模写ではない。」「存在するということは経験し得るということ以外の何物でもないのである。存在判断は」「総合判断である」「存在するという概念は」「形式概念である」「概念なき直観は盲目なると共に、内容なき思想は空虚である。しかして内容は概念から導出すことが出来ず、必ず経験によって

与えられねばならない。存在の判断はかような非合理的な内容を得て初めて客観性をもつことが出来る」（194）、「理論的認識によって経験界を超越せる絶対的実在を把捉せんとする形而上学は誤謬でなければならない」（195）

「**第二**」「この立場から考えられる宗教と哲学乃至宗教哲学との関係は、結局宗教の特異性と独立性との否定に至ることを免れがたいのである」「主理主義的形而上学は、哲学の対象たる絶対的実在と宗教の対象となる神を同一視する。哲学と宗教とは、一にして同一なる真の実在を理解する二つの仕方である」、「宗教は要するに哲学のすると同じことをただ一層低き程度においてなすもの、すなわちそれは理論的認識の一種として哲学の不完全なる形であること以上の意味をもち得ないではないか。宗教は劣等なる認識、低級なる哲学」「宗教は民衆の形而上学」「このような帰結は何よりも事実に反対はしないか」（195）

「宗教は生の特色ある一方面、全人格をもってする一定の態度として、自己の独立の価値を要求するのである。私たちは何よりもこの事実を尊重せねばならぬ」「真の宗教哲学は、生きた経験としての宗教の真理内容の究明に向かうべきもの」「宗教の権利を基礎付けるべきものでなければならないのである」

「**第三**」「主理主義的形而上学は」「具体的なる経験内容を超越して普遍的概念に至って初めて満足を見いだすのであるが故に、その必然の帰結として歴史的事実なる宗教の個性の否定となるのである」（196）、「自己の論述する抽象的、普遍的内容のみを真の宗教と考えて」「哲学をもって宗教に代えようとし、また具体的な宗教の個性を否定したのであった。けれども私たちの事実に対する良心は常に鋭敏でなければならない」「宗教の特異性と独立性とを承認せねばならぬ」（197）

「主理主義的形而上学と」「正反対の傾向にあるとも見られるべき」「**超自然主義**」「に従えば」「絶対なる真理は私たちの能力を遙かに超えた、超自然的な啓示によってのみ与えられるのである」「それは実に奇蹟であり、不思議であり、驚異である」「すべての人間に共通の理性に」（197）「よっては得られないのであるから」「預言者、開祖、始祖などなどというが如き、特殊の人物もしくは特別の信経、経典などにおいて行われる」

「主理主義的形而上学の二つの欠点を」「補って、自己の長所を発揮すると考える事ができよう」、「宗教を知識と混同するの恐れがない」

「次の如き欠点を看過することができない」（198）

「**第一**」「啓示及び奇蹟」「私たちは」「それらがもつ深い意味を肯定し、尊重しなければならない。しかしながら啓示を認識の特殊の根源と見なし、一定の歴史的宗教に真理性の論述とするということは誤謬である」、「もし啓示的認識にして普遍妥当性を有するならば」「認識たるの資格を具えるものとならねばならぬ」「啓示はこの際、一般認識に対して自己の特権と優越とを誇るべき理由を原理的には奪われてしまうのである」、「もしこれに反して、啓示的認識が他とは全然類を異にした認識であって、一般認識の客観性、普遍妥当性の制約を悉く脱するというのならば、私たちはそれについてもはやなにごとをも議論し得ないであろう」「即ち超自然主義が宗教哲学の立場となることは不可能である」（199）

「**第二**」「啓示を宗教的真理の理論的根拠として承認」「かかる啓示を主張する宗教は一つのみに限られず、ほとんどすべての歴史的宗教の共通の特徴であるのだから、啓示に基づくということを理由として、特に一定の特殊宗教の個体的内容の絶対的真理性を肯定し、主張することは不可能である」「かくて超自然主義は、歴史及び個性の慎重という自己の勝れた特色をもついに放棄せねばならぬことになるであろう。このような立場は哲学上の基礎極めて薄弱であって、今日はもはや論ずるに足るほどの意味をもたないのである」（200）

１４．正しい宗教哲学と批判哲学

「批判主義はその主義と精神とをカントから継承する」、「歴史においてその具体的内容を実現する文化の諸領分に関して、それの理性における根拠、その各に一定の意味、一定の価値を与える原理を研究することに、批判主義の根本精神は存在する」、「カントは先ず『純粋理性批判』において、かかる新しい方法、新しい態度を学問の範囲について提出し、遂行した。そして彼は次第に道徳や美的生活の領域へ、同じ態度、方法の適用を広めていった。宗教に関する彼の議論は、幾分の不完全と不徹底とを免れ難いが、しかも原理的には同一の精神に立脚しておるということができる」、「カントにおいて、宗教哲学が批判主義の指示す新しい道を出発し、進行しておるのを見るのである」(201)

「批判主義の宗教哲学は、主理主義的形而上学や超自然主義のそれと異なって、宗教の対象の哲学的考察ではなく、宗教そのものを対象とする哲学である」(201)

「第一、批判主義は形式的理想主義である」「事実から独立に、当に然かあるべしという資格を有する即ち妥当する価値を主張する」「存在よりも当為に、事実よりも規範に重きをおく」、「事実問題ではなく権利問題」「人々は当為もしくは価値の能力を、理性と呼び慣わしてきた。このような理性の立場に立って、批判主義はすべての問題を解決しようとする。即ち批判哲学は理性の哲学であり、批判主義は理想主義である」(202)

「批判主義が形式主義であること」「主理主義は理論的意識が経験を超越して思惟し産出する概念や原理をもって、直ちに絶対的実在の模写であると考える」「内容上の理想主義」、「これに反して、批判主義は自己の論述し、展開する概念や原理が、単に形式的なることを最初から承認する。そしてそれらが経験の提供する非概念的、非合理的内容を待って、また、において、初めて実現を遂げるものであることを主張する」、「批判主義は」「歴史と個性との価値を十分に尊重する。しかも後者が盲目的もしくは独断的なるに反して、前者はよくそれらの目的論的必然性を説く」(203)「ことができる」、「すべての宗教に、それの特有の意味を与える価値または原理は、理性の普遍的、抽象的形式であるが、まったき充実したる生、命と力に溢れた実在は、具体的非合理的なる個体において初めて求められるのである」(204)

「第二、批判主義は反主知主義である」「諸の文化領域を公平に尊重する」、「理性は」「理論理性」「のみを意味しない」、「普遍妥当的なる価値がある限り」「その根底には理性の存在が承認されねばならぬ。理性とはあらゆる種類の普遍妥当的価値の全体の謂いである。それ故に私たちは理論的ならざる理性の存在と権利とを十分に肯定する」、「宗教は、主知主義の人々が誤って観念するように、知識の変形もしくは不完全なる知識ではなく、私たちに対しては、理性の特色ある一領域として、自己の独立性を確保することができるのである。」(204)

１５．宗教哲学の基本テーマ（以下、本論）

「批判主義の宗教哲学の根本問題は、宗教一般の本質の究明である」、「本質」、「事実に関する問題に答える概念ではなくて、あらゆる宗教が、いかなる形においてか、またいかなる程度においてか、実現せんとする目的と解された、価値もしくは原理を現す目的論的概念である」、「本質とは普遍妥当的なる価値の原理、宗教と名付けられる事実に、然か名付けられるべき権利を与える価値内容の謂いである」(205)、「一方においては宗教を他の文化領域と区別してそれを特異」(205)「性、従って独立性を確立し、他方においては宗教を理性に基づけるものとして、それの普遍妥当性を確立し得るは明瞭である」、「宗教に、理性生活の総体において、一切の普遍妥当的価値の全体系において、一定の必然的位置を与えることができるに相違ない」、「二点を注意」

「第一」「本質論は」「事実から出発し、事実を尊重せねばならぬ」、「生きた宗教の事実を否定するのではなく」、「歴史的宗教を理解すること、またはそれの存在を権利づけること」(206)、「事実に基づきつつ、しかも事実の中に没し了らず、事実を出発としつつ、

しかも事実を超越することが必要である」、「本質は事実に意味を与えるもの」（207）
「事実に意味を与えるものが事実を超越したものであるという観念」「理想主義」「プラトン」「永遠にかつ絶対的に妥当する本質によって、個々の美しい物、善き物、すべての経験的現実はそれぞれの意味と価値とを得る」「それ自体において妥当する本質の世界」「イデア」（207）、「いかにして真の認識は成立するのであるか」「天上の真の原型を想起」
「第二、宗教の本質は理性の己に還る自覚によって認識せられるものであるが故に、それは厳密な意味において証明し得ないものである」、「単に理論的な証明が不可能であるという理由で、そのものの価値を否定するのは、結局は主知主義に基づく謬見であって」「道徳や芸術の無価値をも語らねばならむであろう。すべての非理論的価値は証明によってはそれの妥当性を基礎づけられるのではない。私たちに課せられた任務は、宗教が証明を俟たずしてそれ自身において有する価値を発見すること以上に出で得ないのである。知識の限界を自覚せず、また顧慮しなかった過去の多くの宗教哲学が試みた神の存在証明」「失敗に帰せねばならなぬは当然の運命」（209）
「それ自身において承認せられるべき権利を有しすなわち妥当性を有し、従って万人より承認を要求するあらゆる理性的価値の体系に宗教も属することを究め」「宗教の占める位置を明らかにすることに私たちの宗教哲学の中心的任務は存在する」
「宗教の本質は何であるか」「私の回答の要旨」「理性の普遍妥当的価値を、私たちにおいて、また私たちを通して、その価値内容を実現する超越的、絶対的存在の顕現として体験することに宗教の本質は存在する」

１６．「いかにして私の主張を基礎づけうるか」

「まず価値判断の考察から出発」「価値判断は、評価の主体たる私たちに対する意味より、二種類に分かつことができる」「一は快、不快を根本的方向としてそれを通じて個性づけられるものであって、私たちの自然的欲求が満足されるか否かに関係する」（210）、「精神的、文科的価値の領分に属する」、「普遍妥当的なる価値の意識は理性にほかならないから」「かかる種類の価値を理性的価値とも呼ぶことができよう」、「私が宗教の哲学的基礎付けの出発点とするのは実にこの理性的価値である」
「理性的価値の普遍妥当性が、事実上一般に承認されるということを意味しないのは明瞭である」「精神的、文化的価値の主観に対する関係は、当為の関係である」
「理性的価値は、本質上、超越的、絶対的である。しかもかくの如き超越的絶対的なる価値は、現実の世界において実現されねばならぬ」（211）
「精神的、文化的価値は自体において妥当するのみならず、否、然か妥当するが故に、それはまた現実的、具体的の主観に対して妥当し、従ってかかる価値は先ず当為として事実上の承認を要求し、更にまた具体的、個体的なる現実的内容をもって充たされるべきことを要求する」、「このことたる固より私たちの概念的理解を超えた人生の秘義である」「それは理性意識、精神生活の根本事実であり、いやしくも意義ある生活をなし得るための根本制約である。しかしてかかる人生の秘義こそ正に批判的宗教哲学の出発点である。」
「理性的価値の承認は、当為のために当為を承認する、自由なる、自律的意志において初めて実現される。強いられず、誘われざる自己決定によって当為のために当為を承認するところのものは普通良心と言われておる」「良心を通じて」（212）、「良心の声」
「もし価値が一層上の実在、真の実在、絶対的実在と一つであり、従って逆に、現実の世界が第二義的実在となるというのでないならば、良心の事実は不可解であるのみならず、また不条理である」、「価値と実在との合一の承認は、信仰もしくは確認に属する」、「理性の根本事実を承認する以上、いやしくも人生に意味を否定しない限り、避け難き、従って必然的、普遍妥当的なる確信である」、「理性的価値とこのような超越的、絶対的実在との合一を、従って前者を後者の内容として、顕現として、体験することこそ宗教」（213）、

「宗教において価値は実在と合一し、その妥当性は実在的根拠を得ることにより、私たちの左右し難き、犯しがたき尊厳を明らかに発揮する。すなわち宗教意識が神聖と呼ぶものの哲学的基礎はここに存在するのである」（214）
「第二の道」「一方では単に妥当する価値、唯要求し、命令するのみなる当為、他方では無力なる、実現の保証を与えぬ実在、この二者の間の裂けがたきディレンマに陥らざるを得ないであろう」、「宗教が特注の任務を提べて現れるべき位置を発見する」、「当為と存在との乖離、理性の要求と人間の能力との不相応、価値の形式と価値の内容との不一致の意識は、理性を現実以上の実在と同一視する立場において初めて除くことができるのである」、「価値を本質とする超越的、絶対的実在を、従って神聖なる実在を、私たちの理性、私たちの真の自由において、またそれを通じて、彼自身を実現する無上の力として体験することこそ宗教である」（215）
「無上なる力、神聖なる実在に対しては、私たち人間の無能力は罪悪の意識となる。罪悪の意識は解脱または救済の要求を必然的に含意する」、「救済は絶対的実在そのものが、罪悪の状態にある私たちに、その上なく価値ある本質とその限りなく勝れた力とを、すなわちこの極なく尊き自己を与えることによって成し遂げられる」（215）、「宗教的意識が愛、慈悲、恵みなどと呼ぶ体験の哲学的基礎は存在する」、「私たち自身において超越的にして、しかも内在的なる絶対的理性そのものを体験すること」「これが批判哲学の確立する宗教の本質である」（216）
「カント」「道徳的価値に実在的根拠を与えるものとして宗教を観念した」「理性一般の要求として宗教を示さねばならぬ」「宗教の基礎としての道徳に優先権をは承認せざるを得ない」（216）、「道徳の概念を」（216）「一層広義に解し」「自由にして自律的なる意志を道徳の心髄と考えるならば」「宗教の基礎は特に道徳に存し、道徳を徹底しむれば宗教に至らねばならむということができよう」（217）
「人格の本質は精神的価値の承認及び実現に向かう自律的活動にある。自己の生存の意味及び目的の自覚的実現ということにおいて、私たちは人格的活動の核心を把捉する」「人格的生活の最も深き要求、最も高き理想に実在的根拠を供する点において、宗教は人格を成就し、人格を完成する」（217）
↓
「第四章　宗教哲学の諸問題　特に神の観念」（217-232）
「第五章　宗教哲学の諸問題　特に救済の観念」（232-242）
「二三の宗教哲学の問題」：神の観念（人格神論、理神論、汎神論）、救済の観念（悪、神義論、神の国、不死不滅、永遠の生命）

（３）1920 年代

１．「宗教学」（1922、『岩波哲学辞典』の項目）

１．特殊宗教の研究
・宗教史学：宗教を変化しつつある活きた個体のままにおいて認識
歴史学の本質：個性と発展、現実と価値
宗教史学は、一定の価値をその成立の制約として予想するが、問題とはしない。この宗教史の前提とする価値内容、その普遍妥当性の根拠を究めるのが宗教哲学
・神学：活きた宗教的体験を前提とする、生（ライフ）と学との結合一致を目的とする。
各宗教は各特殊の神学を有する。諸宗教共通の神学はあり得ない。
組織神学：規範の定立及び基礎付けを目的とする。規範的意義ある思想内容、真理内容の方法的体系的論述。
特殊宗教の思想における自己形成としての組織神学は歴史学､歴史神学を基礎とする。

哲学を基礎として、哲学が示す宗教一般の本質、あらゆる宗教に共通であり、理性の本質に基づく宗教一般の真理内容が、特殊宗教の本質において特殊化個体化されるかを明らかにする。具体的価値の発展を示す歴史と価値の永遠的普遍的妥当性の根拠を明らかにする哲学とを結合する。宗教生活そのものが思想において自己実現をなす。

↓

指導的意義を有する哲学として、カントの批判哲学。組織神学の理想に幾分なりとも接近するシュライアマハー。

２．宗教一般の研究

・宗教現象学：事実の研究。諸宗教の通有性を対象。

・宗教哲学：批判哲学の研究法を宗教に適用したもの。事実より規範へ、現象より本質へ。

宗教の本質、理性そのものの本質に基づける→普遍妥当性。

理性の本質に基づく宗教共通の思想内容。宗教の永遠の権利を保証、宗教の真理性。

哲学は哲学としてあくまで普遍的立場を去り得ぬ。生の取るべき大体の方向を示し、本質の実現様式として考えられる生の価値の段階を教える。それ以上は、人格的確信の領分。かくの如き確信が活きた特殊の宗教的体験と結合するところに神学が成り立つ。

参考文献：トレルチ「宗教の本質と宗教学」

２．「プロティノスとカント――宗教哲学の二つの任務」（1925）

「プロティノスの哲学」「ギリシアの哲学思想史において最も代表的な位置を占める」「かれの宗教哲学は有力な一個の典型――タイプを代表する」（399）

「このタイプとは異なり、むしろそれと対立の位置を占める、他のタイプ」（399）と「相対照せしめつつ宗教哲学」を眺めてみたい。

「プロティノスの歴史的影響は広く強く深くあった」「ダンテとゲーテ」「アウグスティヌスよりヘーゲルに至るまでの形而上学殊に宗教哲学」（404）、「この主知主義こそギリシア思想の極めて著しき特徴であり、この立場に立つ宗教哲学こそカントの出現に至るまで千数百年の思想の歴史を支配した大勢力であった」（406）

「宗教そのものを対象とする、真の正しき意味の宗教哲学はカントとシュライエルマッヘルとを出発点とせねばならぬこと、それは宗教的体験の事実より出発し又絶えずその事実と交渉を保ちつつ、しかも事実より独立なる意味の世界、事実を意味づける価値の世界をわが固有の領土と見なければならないこと」（409）

「批判的宗教哲学の上に建設されるべき宗教形而上学」「容易な業ではない」、「もし幸いにしてかくの如き右京形而上学が成功するならば、哲学は独断主義に陥らずしてしかも世界観の学としての古来の光輝ある伝統に添いうるであろう。哲学は生と極めて親密なる関係を結び、生に養われつつ生を富まし、生を支配しつつ生に奉仕するであろう。宗教哲学はこの大任がカントとプロティノスとの総合によってはじめて果たされるというのが私の確信である」（414）

３．方法論から見た波多野宗教哲学

（１）『宗教哲学序論』（1940）のポイントと抜粋（「第四章　歴史的瞥見」は省略）

序　「現代は決して宗教に対する学問的関心を欠いているとは思われぬ」、「宗教の哲学的研究が量的にも質的にも痛ましいまでに貧弱」

「宗教哲学は宗教的体験の理論的回顧それの反省的自己理解」（245）

「本書は「宗教哲学」を方法論的観点より補う」「一種の循環論に相違ないが、循環論は哲学においてはむしろ体系と名付けうるものの必然的属性に過ぎぬ」（246）

第一章　宗教学と宗教哲学　実証主義

１　「宗教学」「語義上」「宗教に関する乃至は宗教を対象とする学を意味する」
「学の性格はいかなる事柄（対象）をいかなる仕方（態度方法）を以つて取扱うか（研究するか）によつて定まる」「決定的意義を有するは後者」「しかしながら」「本質上互に相呼応する内面的連関が両者の間に成立つ」（247）、「取扱い方態度方法の観点より、問題の検討を行なうと思う」「経験的科学とは異なって、少なくとも異なった程度」（248）

２　「「宗教学」という語」「理神論」「ヘーゲルの「宗教哲学」において」（248）
「十九世紀の半ば」「「宗教学」という語は特殊の新しい含意を示唆するものとして用いはじめられた」「神学、次では宗教哲学、と特に区別される新しき特殊の学的研究として「宗教学」と解し、その名の旗印のもとに同士相呼集り或いは国際的にも及ぶ精神的団結を結びつつ、学会の大勢を支配するに至った」、「宗教の経験科学的研究という制限されたる特殊な意味に「宗教学」を解し排他的の含意をもつてこれを宗教の学的研究の中心に据え、厳密の意味の学問はかくの如きものでなければならぬとする傾向」（249）
「「学的」と「経験科学的」を同一視する立場であり、通常実証主義（Positivismus）という哲学的術語を以つて呼ばれるもの」「コント」「実証主義的宗教研究は必然的帰結として宗教の否定に導く」「宗教の事実を曲解し歪曲する」（250）

３　「実証主義の基本的の教は、一切の認識一切の学問は事実――勿論経験的感性的事実――のそれに尽きる、事実の言表はしに厳密に還元し得ぬ命題は全く無意義であるというに存す」「認識の任務と能力を事実の領分に限局し、事実の確立及び結合以外には一歩も踏出してはならぬと主張」
「まず事実の事実性（事実であること）に重心が置かれ更に事実相互の間の関係に関心が向けられる。コントの如きは特に第二の点を重要視し、単に事実を確立するに止まらず進んで事実の間に存在する止まらず進んで事実の間に存在する恒常的関係即ち法則を極めてことを究めることを学問の中心的任務を説き」（251）、「認識に関するこの制限は存在にも当然当てはまる。事実として認識し得るものの外に実在はないのである」「「観察」即ち感性的知覚」「に根拠を有せぬ観念を空想の産物として斥けた」
「空想の産物を実在と誤信する段階」「「神学的」段階」「超自然的な実在者があるように」
「第二の「形而上学的」段階においては、かかる擬人的実在の代りに抽象的概念例えば本質や原因などの諸概念がそれ自ら実在するものとして立てられた」「これらの架空の妄想を駆逐することが実証主義の重要な任務の一である」（252）
「事実性が認識及び存在の究極の原理である所には相対主義は避け難き帰結である」
「認識が第一に主体即ち認識の器官に適応していること、第二に人類の歴史的発展において各時代各段階の社会的文化的情況に必然的に連関し依存しており」
「彼が明白に説いたのはいわば認識論的相対主義に過ぎなかった」「これは第一に認識乃至学問において絶対的真理を求めたり主張したりするの愚を排し」「偏狭固陋の独断論的態度を和らげて余裕ある一種の精神的雰囲気を作り出す効果を有するには相違ないが」
「しかしながら」「もしこの相対主義を存在論の方向の徹底せしめたならば、濃厚なる自然主義的特色を呈する相対主義が実証主義の必然的帰結としてその姿を現わすに至るは必定であろう」（253）、「原始的直接的なる従って自然的なる存在しか認め得ぬ点においてそれは自然主義でもある」（254）

４　「相対主義は宗教の指向する所それの内面的意味とは断然相容れぬ。宗教において主体（自我）の対手としてそれに関係交渉に立つものは、それの存在の性格より観れば、絶

対的実在者と呼ぶべきものである」「宗教自らの言葉ではそれは「神聖性」と呼ばれる」「それとの接触は他のものにとっては全くの破壊を意味するもの、絶対的に侵すべからざるもの、一切を無に帰せしめるもの」「自然的直接的関係を根本より覆滅しつつ更に高次の関係を定立するであろうとは期待されねばならぬ」(255)
「コント」「はかく解されたる宗教を露骨に正面より否定したのではなく、かれの持論たる認識相対主義に従って、正しき認識乃至学問の未だ存在しなかった幼稚未開の社会において生活を指導する役目を果たし得たものとして、それに歴史的意義並びに価値を許したに相違ないが」「実質的には宗教の否定こそこの説の精神であるといふべきである」(256
「等しく実証主義の立場に立った Ludwig　Feuerbach が宗教の対象の実在性を否定したのはむしろ率直なる徹底したる態度と賞賛すべきである」
「宗教の真理性を承認し得ぬ実証主義者も宗教の事実性は肯定せざるを得ぬ。かくて事実としての宗教の説明」「人間学的観点よりの宗教の理解はかれらの避け難き課題をなすに至る」(257)

5　「実証主義の中枢に虫食う」「明白なる自家撞着的態度」
「一切の認識を事実の確立と結合とに」「釘づけしようとするものが一定の哲学説を説くのがすでに矛盾である」
「実証主義は明らかに宗教の本質を論じている。しかもその本質論は宗教の事実が有する内容、それが内に含む意味、それが志す所を予め否定して掛かる、即ち事実の研究に取り掛かる前に予めすでに事実を無きものにしようとする成心と敵意とを抱く、極めて独断的なる事実無視の態度を取るものである」(260)
「しかしながら翻って考えれば、実証主義が綱領の第一位に掲げる事実の尊重はたしかに正しき態度である」「宗教の学的研究は事実を与えられるままより出発し」「先ず第一歩としては経験的科学として成立たねばならぬのは殆ど自明の真理である」
「誤謬は事実の尊重そのことにおいてではなく、尊重の仕方において存するのである」(262)

6　「事実尊重の正しき仕方を理解し得るがため、事実を構成する二つの要素（又は契機）に注目すべく促される」「すべての事実は事実性と内容との二つの要素より成る」「事実性によって事実は他のもの」「に対して内容としてその中に取入れられるを拒む独立なる存在である」「そのことは」「いわば漠然たる形式的の事柄に過ぎぬ」「事実については吾々はそれが何であるかを問わずにおられぬ」「内容はいつも主体との生の連関において立ち、体験の内容をなすことによって事実の内容をなす」(263)、「内容にとっては理解されるということが本質的である。それ故それはまた意味と名づけることができる」
「事実性によってそれは外面的存在の内容をなすが、それ自らとしてのそれの存在は内面的である」「外面的なものと内面的なものとは事実の欠くべからざる離すべからざる二つの要素である」「両者のいづれかに特に注意を向けいづれかに特に重心を置くことはできる」「認識の仕方に従って学問（この場合は経験的科学）に二つの異なった方向従って二つの異なった類型が成立つ。自然科学と精神科学」
「自然科学」「事実性に重心を置きその方向に力を集中する」「極限をいえば内容無き事実性」「内容をできるだけ希薄にして内容無き事実性の極限への接近を計る」「事実性は外面的関係において成立つ」「単純なる平等なる内容的要素の外面的（この場合は時間的空間的）接触及び交渉において成立つのである」(264)
「精神科学は事実の内容に重心を置く。内容は体験との連関においてのみ存在するゆえ、主観性はそれの欠くべからざる特徴である」「経験的科学である以上精神科学も事実を対象となし事実性をいつも必要事項として取上げるのであるが」「眼目とする所はむしろ事

実の含む内容と意味とに存する」「内容の尊重は個性の尊重である故、宗教の歴史科学即ち宗教史は精神科学としての宗教学」「において基礎的意義を有する学科となろう。それより進んでは宗教の事実を内容の共通的傾向という観点より体系的に研究することも可能であり又必要であろう」（266）

「精神科学を内容の方向に徹底させたならばいずこへ行着くであろうか」「理解はいつも内容の共通性を要求する。異なるものが相連関し相一致する所において又そこを通じて理解は行われる。しかるに事実の内容の理解は事実性の制約のもとに従って外面的排他的限定のもとに行われねばならぬ。それ故かかる外面的限定の超越及び克服は理解の可能及び進展の必須条件でなければならぬ」「この方向に歩み始める」「事実性が全く超越されるべき限界線」「最後の一歩をもって断然この限界線を通り過ぎ純粋の意味の世界に踏入るのが哲学である」「このことは可能である」「何となれば内容の方向に進む主体にとっては事実性も限定を意味する特殊の内容に過ぎぬから。すなわち内容が事実性の制約のもとに立つ間は、それの「あり」は、これ乃至これの又はかれ乃至かれの、ここ又はかしこ、この時又はかの時などの互に相容れぬ外面的規定に従う。」「かかる制約かかる特殊の内容規定を離脱したる自由の境地を求めねばならず」（267）、「事実の内容そのものに内在する内面的要求の、貫徹に外ならぬ」「互に連関と一致を拒む排他的なるいくつもの映像として成立つ物の姿を、本来の単一なる真のあり方において見ようとするのが」「プラトンの用語を借りるならば」「物の真の存在（ontos　on）物の本質（ousia）を見ようとするのが哲学である。吾々はこの意味の哲学的理解を宗教に関して要求する」（568）

第二章　誤れる宗教哲学

一　合理主義

７　「カント」「に至ったまでは」「宗教哲学は宗教の対象」「を、通俗的にいえば神を、捉え来つて直接に理論的論究の対象となす哲学であった」「一般認識の方法を」「そのまま神に適用する」（269）

「合理主義」「神を直接の対象としようとする即ち神の学であろうとする点より、かかる哲学はアリストテレス以来「神学」とも呼ばれた」「一般認識と共通の方法によることは、又人間が本性によって、乃至本来即ち自然的に、所有する理性によることである故、この「合理的神学」（rationale Theologie）はまた「自然的神学」（naturakiche Theologie, theologia naturalis）とも名づけられた」「トマス・アクィナス」「神の実在性の証明は神学の全体系を支える緊要欠くべからざる礎石と考えられた」「人間の認識は感性的知覚にはじまり感性的に与えられる事物を最も近き対象として有する故、感性を超越する神の存在は証明によってはじめて到達されるのである」「一旦神の存在が確立された以上は、哲学は更に進んで神が何であるかを」（270）、「例えばその永遠性単一性無限性などを、又世界、しかして特に人間との関係を論究すべき勤務を有する」「これがカント哲学の出現まで一般に行われた宗教哲学の大体の構造である」「合理主義の宗教哲学」「ヘーゲルの如きでさえ、この点に関してなお旧套を脱しきれなかった」（271）

8　「認識の直接の対象は観念的存在観念的内容である。実在は決して主体（自我）の中に入り来らず、認識はいつも表象や概念の内容において乃至それを通じてのみ行われる」「他の何ものの中にも入らず他者に対して自己を主張貫徹しようとする」「実在者との接触交渉に際して観念者は実在的他者の象徴、それを代表する記号、それの語る言葉の資格を得る。直接の体験より反省に進むびつれて勿論観念者と実在者との間に一種の隔りは生ずるが」（271）、「その隔りを克服し内容の象徴性を或は維持し或は設定することに認識の任務が存する」「観念の実在的象徴性は実在の認識における動かすべからざる基本的原理

である」「吾々の日常生活吾々の自然的並びに文化的生活はこの原理の承認の上に立ち、誤謬の排斥も修正もこの前提の下においてのみ意義をもつ事柄である。反省される場合には象徴性は間接的となるであろうが、思惟の根源である体験にまで溯ればそれは直接的である」「自然的実在に関する限り、象徴と実在との関係は一義的直線的連続的である。かくあるが故にこそ、感性的経験の具体的内容より遠ざかる抽象的概念（例えば法則）や観念と観念との関係を整理するに過ぎぬ論理的工作がなお実在的妥当性を保ち得るのである」「もし観念的内容が一義的直線的連続的に従ってこの意味において直接的に実在の象徴たるの資格を有せぬならば、自然の認識にもとづく自然の支配あらゆる技術あらゆる物質的文化否あらゆる文化は忽ち消え失せねばならぬであろう」（272）

「この直接的象徴性は宗教の対象にも当てはまるであろうか」「カントは実在の全面的の不可認識性を認識論的に証明することによって、神の不可認識性従って合理的自然的神学の不可能性をも証明し得ると信じた」

「カントが観念主義的認識論の立場に立ちながら Ding an sich（物自体）の名の下に実在の概念の有意味を肯定したことは」（273）「むしろ賞賛に値する。観念のみの世界というが如きは空想と現実との区別を忘れた哲学者の誇大妄想に過ぎぬというべきであろう」「純粋なる反省の立場」「においてはもとより「物自体」は矛盾の概念に過ぎぬであろう」「観念主義の放棄の必要性」「実在の体験をもっと素直に承認し、もっと徹底的に考慮する」

「実在はカントの語を借りるならば「物自体」である。すなわちそれは主体の中に入り観念的内容となるを断然拒むものである。しかしながら実在との交通が行われることは生そのものの基本的事実である。しかしてその交通は観念者としてしかも実在者を、実在的他者を、代表する象徴において又それを通じてのみ行われる。認識はかくの如き象徴性を保有することによって実在的妥当性を獲得する」「それ故神が理論的認識の対象であるか否かは、吾々の表象や思惟がそれ自らとしてそれ自らの意味する所をもって一義的直接的に宗教の対象の象徴たる資格を有するか否かによって決せられねばならぬ。かくて問題の解決の鍵は、理論的認識のみを眼中に置く認識論によってにあらず、宗教的体験をも視野に収めそれの固有の特異性を考察に入れる包括的なる人間学的論究によってのみ与えられる」（274）

「宗教的体験の対象の最も基本的なる特徴は、宗教自らの言葉を用いるならば「神聖性」である」「神は人間の力をもって到底処理し得ぬものであると」「主体への超越性を保ち徹頭徹尾他者性に留る点において、それの実在性は純粋又は絶対的と名づくべきものである」「神は自己を啓示する」「従って吾々は何等かの仕方で神を知る」「「知る」という働きは自然的実在の理論的認識の場合と同様に象徴によって即ちこの場合は神の言葉によって行われる」(275)、「決して神という実在者の理論的認識という意義を担うものではなく、むしろ譬喩的表現の部類に属すべきものである」（276）

「「宗教と呪術」の複雑なる問題の議論」「呪術は認識にもとづく応用的なる実践的技術の部類に属するのである」「科学と呪術との類縁を説いた Frazer 一派の学説はこの点に関する限りたしかに真理の一面を捉え得たというべきである」（277）

９　「神の不可認識性は宗教の特異性の必然的帰結である」「合理主義の誤謬が宗教の特異性の無視に存する」（277）、「合理主義が正しいとするならば」「哲学と宗教とが全く同一任務を果たすべきであり又果たし得るものならば」「この立場を当然の方向に徹底するならば必然的帰結は宗教の否定でなければならぬであろう」

「ここに宗教を肯定するという前提のもとに両者の関係を調節し規定することが必要になろう」「最も簡単なる解決は」「「自然的神学」を」「唯一の真の宗教と高圧的に宣言し、「啓示宗教」を」「否認することであろう」「理神教(Deismus)」「この傾向の最も普通に行われ

る形は、宗教を変質したる又は俗見と妥協を遂げた低級なる又は間に合わせの哲学となすものである」「ギリシアの思想家たち、オリゲネス」（278）、「近世ではヘーゲルなど」「人類の歴史的発展において必要なる準備教育の段階と解したレッシング」「実証主義とは全く正反対の態度を取りながら、この立場の必然的帰結も宗教の特異性と従ってその独立性との否定に外ならぬ」
「かくて吾々はあらゆる囚われたる偏見より自由になり、宗教の内面的意味内容を尊重しつつ虚心坦懐それの研究に向う哲学的立場を要求せねばならぬに至る」（279）

二　超自然主義

１０　「しかして超自然主義はその要求を充たすかに見える」「シュライエルマッヘル以来用い慣れた新しい語義においての神学」（279）、「個々特殊宗教の立場において自己の教義の理論的展開根拠付け弁護等を任務とする学問という意味の神学」「合理主義とは対立の関係に立ち全く異なる傾向を示しながら、宗教の対象を直接に理論的認識の対象とする点においては共通なる哲学的意義を有し従ってここに宗教哲学の一つの立場として検討される資格を有する」「歴史的宗教の」「随伴現象として存在」「学問的体系的の形態を示すものは単独には成立ち難く合理主義と結合して存在する」「トマス・アクィナスは最も影響深き模範」
「この立場は神の超越性を基本原理とする」「人間本来の認識能力即ち理性を全く超越する」「人間の有限性より」「罪悪より」「超自然的啓示が」「神の恵みによって」「与えられる」（280）
「全く不思議不可解の出来事であるゆえ、驚異（奇蹟）」「絶対的権威」「かかる権威に服従して真と承認する働きが信仰である」「超自然と自然、啓示と理性、信と知との対立及び峻別はかくの如く神の超越性と緊密なる連関を保ちつつ超自然主義の中心思想をなしている」（281）、「超自然主義の神学が神を直接に理論的認識の対象としていること」「合理主義の自然的神学と全く同一の態度を取る」「疑わず問わずただひたすらいわば盲従的に、権威に服従するを意味する信仰と相俟って、極めて幼稚なる認識方法」「学校教育上教科書が無知なる生徒に対して有する権威と原理的に同一部類に属する」（283）「超自然主義は畢竟不徹底なる、己の力の及び難き確実性を誇称する点においては僭越なる、しかして啓示の神々しき仮面を被つて己れの醜悪を掩わんとする点においては冒涜的なる、合理主義の一変態でなくして何であろうか」（284）

１１　「それの単独純粋に近き形態に出会い得ぬ事実」「啓示による認識以外理性による自然的認識を何らかの形何らかの程度において承認することが必要になる」「信と知との問題は畢竟かかる妥協乃至総合の問題に外ならぬ」「二つの異なった方法」「アンセルムス」「トマス・アクィナス」「アンセルムスの教は信仰と認識との全面的一致を説く」（284）
「信は知に対して自己固有の独立性と優越性を保有する。しかしながら吾々は信に立止まってはならぬ、進んで同じ内容同じ対象を理性の力によって理解し認識せねばならぬ。「「われ知らんがために信ず」（credo ut intelligam）の真の意味」「しかしながら信と知との核の如き一致はアンセルムスにとって」「一個の信仰に過ぎなかった」「彼の証明の理論的価値を承認し得ぬもの、かくの如き商況の可能性を原理的に拒むもの、に対してはその事実は理論的には全く無力といわねばならぬ」（285）
「トマス・アクィナス」「「理性より」（ex ratione）と「理性を超えて」（supra rationem）との区別」「一は人間の理性を超越するもの、他は自然的理性が固有の力をもって把握し得るもの」「あらゆる感性を超越する神の本質は同時に認識をも超越する」「しかしながら」「すべて感性的なもの世界のあらゆる存在は結果として原因たる神に依存する故、吾々は仕業

より推してその根源である限りにおいて神を認識し得る」「一切の事物の第一原因としての神の存在（実在性）」「これら両種類の認識は断然混同を許さぬが、他方又没交渉や単なる反対を許さぬものである。「理性を超えて」は決して「理性に反して」を意味せぬ」「両種の認識の間に一致乃至協力の関係が存在せねばならぬ」（286）
「両者の一致」「第一。自然的理性が独力によって達し得る諸真理は信仰に近道を通じても等しく与えられる。第二。自然的理性は啓示的真理を厳密の意味において証明することは不可能であるが、種々の蓋然的論拠を提供して幾分の援助を与えることは可能である。殊に反対論者の論拠を反駁することによって間接的に真理の認識に寄与する。第三。超理性的啓示の必要は理性の論拠によって従って合理的に認識される」「トマスに従えば理性は自己に許されたる自由と独立性とを働かせることによってむしろ自制と従順にの必要を自覚するのである」「穏健なる部分的協力が体系的連関において一応理論的根拠付けを見出している」（287）
「理論的体系的優越性」「しかしながら超自然主義と合理主義とは歩み寄りにより互いの欠点を幾分糊塗するには成功したものの、それを除去することは全く不成功におわった」「合理主義は超自然主義の土台石の役を務めることによって本来の性格を改めるに至らず、しかして超自然主義は変装したる合理主義に過ぎぬことは、両者が妥協を遂げ得たことによってむしろ明瞭になった嫌いがある」（288）

１２　「この破綻を幾分なりとも緩和するに役立つたものがある」（288）「ギリシア哲学の影響のもとに合理主義の従って哲学思想の体系に組入れられたものである。認識の理想に関する教がそれである」
「キリスト教において人間の生の完成状態としてその永遠の生の内容として「神を見る」ことがはじめより説かれていた。しかるに他方ギリシアの哲学思想においては認識の本質は「見る」働き即ち直観に置かれた」「認識の働きが本質上観る働きであるならば、推理も一歩一歩は直観である」「観る働きも観られるすがたも不十分不完全」「かくの如き不安的の移動が安定と静止とに帰し、観る働きと観られる相とが即ち主体と客体とが完全なる一致を遂ぐべき状態、狭義厳密の意味における直観が理想として立てられ或いはあこがれの目標として或いは享楽の内容として説かれた」（289）
「この思想に宗教的意義が加われば、観念そのものに神的実在を見るイデアリスムの宗教、乃至それの徹底化としての神との完全なる合一乃至同一化において成立つ神秘主義が宗教の唯一の形態となるあろう」「トマス・アクィナス」「カトリック的キリスト教はキリスト教とこのギリシア的の思想及び宗教との結合を特徴とする」、「「神を見る」ことも」「死後の生活にはじめて実現をみるべき超越的永遠的なる浄福の内容として希望の対象となった」「自然的認識のみならず啓示的認識もそれの不完全なる準備的なる形態として解釈され得るであろう」「合理主義の段階における認識は対象のみならず認識の仕方においても不完全であり、超自然主義の認識の仕方は不完全むしろ最も不完全でさえあるが、対象においてはすでに最高段階即ち神の本質に到達し、永遠の浄福の一歩手前まで向上の道しるべを務めるであろう。これがトマスの思想の趣旨である」（290）
「宗教的生は現実の生活においては実は完成を見ず、その完成は希望の対象たる永遠の生活に委ねられねばならぬ故、それの性格と特徴とは現実的に与えられる所のものを標準としてのみ理論的規定を見るであろう」「認識の直接的対象は観念的存在に過ぎぬ故、宗教の対象もそれにとって最も重要なる特徴である実在性を失わねばならぬに至るであろう」「この立場において許される宗教の類型が厳密には理想主義と神秘主義とに限られることは、宗教哲学の正しき立場としての資格をはじめより奪い去るであろう」（291）
「合理主義及び超自然主義の欠陥を単に両者の直接的総合によってのみならず、更に宗教

的信念にもとづく一層高き立場よりする総合によって克服しようとしたトマスの傑出した典型的努力もかくしてついに失敗におわった、又おわらぬを得なかった」（292）

１３　「宗教的対象の超越性がトマスにおいてはなはだ不徹底であるという事実」（293）
「Gilson は「中世哲学の精神」と題して」「トマスが神の諸属性のうち「存在」を中心に置き、しかも「存在」をギリシア哲学者の如く主として「しかある」（即ち essentia）の意味に解せず、むしろ実在性（existentia）を含めたる否特にこの実在性の意味に解したことを力説し、それをかれの所謂「キリスト教的哲学」の特徴として指摘した。これは適切な観察である」「中世哲学が宗教的特色の特に鮮やかな宗教的体験に基づいている証拠であって」（294）
「比較を離れては成立ち得ぬ」「かくの如く実在性の意味の他者性（超越性）までが観念性のうちに融け込んだところでは、神の超越性が比較的のもの相対的なもの以上にでることができぬのは当然である」「程度は程度であるに変わりない」「神は原則的に可認識的であるが、ある程度ある点においては不可認識的であるというに過ぎぬ。かくの如き立場において認識論が徹底を欠き矛盾を示すは当然期待し得ることであろう」
「トマスは、神は永遠的である、神はかれ自らの essentia である、神においては essentia と existentia は同一である、などの極めて積極的なる極めて肯定的なる言表はしまでも、神は「何でないか」の否定的言表はしの中に数えねばならぬという窮状に陥った」（297）
「神と人（乃至世界）との間に存する不連続性は宗教的体験の最も基本的なる要求である。この本道を避けて連続性の方向に迂回を試みるならば目的地への到達は予め断念されねばならぬ。しかもこの脇道こそ合理主義の取る所、最も徹底的に取る所のものである」「削除（remotio）による消極的認識も、因果関係に基づくしかも究極は存在の比論に根ざす譬喩的認識も、等しく神の本質 essentia の認識、神そのものを直接に対象とする理論的認識でなくて何であろうか」（298）

三　バルトとブルンネル
１４、１５

第三章　正しき宗教哲学
１６　「宗教の学的研究は事実の内面的意味を前提せねばならぬ。この内面的意味は体験において与えられ又知られる。合理主義の宗教哲学と異なって正しき宗教哲学は宗教的体験の反省的自己理解、それの理論的回顧として成立つ。体験の立場に立つものは宗教が他と混同を許さぬ固有の意味内容を有するを知る。かかる意味内容を反省に上せ、それの理論的理解を原理へと推進めて行くものは本質の観照把握に到達してはじめて満足を見る。この本質の理解こそ宗教哲学である。」（314-315）
「「反省」（Reflexion）は人間において最も人間的なる働きである。それは主体にとって「自己」の解放を意味する。他者は主体を拘束するを止める」、「主体と客体の分離」「「我」又は「自我」として成立つ」、「反省はかくの如く生と体験とに対してそれのうちにすでに潜在していたもののあらはの展開として人間性の最も固有なる特徴をなす。」（316）
「自然・文化・宗教（道徳）――並びに主体・自我・人格」（317）
「しかしてこの進路の終点に哲学が立つ。体験内容の学的理解は精神科学的考察よりはじまり、事実性を超越することによってつひに哲学に到達する」（317）
「宗教哲学はその諸概念諸学説が体験内容の反省的自覚的展開であることに何より先ず留意し、それを絶えず体験における根源まで遡って批判することを忘れてはならぬ。それらは決して体験内容の繰り返しではない。」（318）

「研究者自身の有する事実的体験」「研究者自身が何らかの宗教的体験を有することは原理的には必要である。しかしながら宗教の哲学的研究は決して単なる事実の認識ではない。」（320）
「研究者は材料を広く汎く自らの体験以外の事実に求めねばならぬ」「第一に他人の体験」「宗教世界の傑出したる偉人たち」（321）
「この難局に際し救助に来るは研究者自身の体験である。あらゆる体験のうちこれのみが内面より直接に与えられ又知られる」、「体験へ、しかしてそれの本質へ」（323）
「第四章　歴史的瞥見」 ルッテル、カント、シュライエルマッヘル、ヘーゲル

１７　「「類型」（Typus）は精神科学並びにその基礎の上に立つ哲学においては重要なる地位を占める概念である。」（325）
「自然科学的説明と異なって「理解」ははじめより全体と部分、普遍と特殊との交互作用によって行われ、従ってはじめより類型へと向かう抽象作用と総合作用とによって成り立つといっても過言ではない。」（326）
「宗教の哲学的類型論」（328）

１８　「残された第三の部門は「宗教の哲学的人間学」である。類型論が宗教の対内関係を処理するものとすれば、人間学は対外関係より来る諸問題の解決に当たる。宗教はもとより生において単独に孤立して存在するものではない。体験において又特に表現において生の他の領域と連関を保つ。」（332-333）
「生の全体における宗教の占める地位を究める。」（333）
「宗教の本質は生の連関におけるそれの中心的地位を要求し正当化する。」（337）
「真理の澄み渡る光の中に鮮かなる輪郭を現はしつつ聳え立つこの生の最高峰の姿を、清められたる人間性の眼の及ぶ限りをもって仰ぎ見る、――これが宗教哲学である。」（337-338）

（２）波多野宗教哲学の方法と構造

１．波多野宗教哲学方法論の発展（1920 年代～ 1930 年代）――宗教哲学の本質及其根本問題（1920）との比較

０．基本的構想は思想の発展過程において一貫している。
１．実証主義との対決　→　事実、意味、象徴などの諸概念による経験構造の明確化
２．歴史の個別性、類型論から本質論への展開
　　『宗教哲学』実在する神、「力」の神、「真」の神（イデアリスム、神秘主義）
　　「愛」の神（人格主義）
３．哲学的人間学の位置づけ　→　生・時間性の三つの類型論（『時と永遠』）へ
４．議論の精密化（1930 年代のキリスト教思想の問題状況を踏まえた）
・現代神学の思想状況：超自然主義という文脈で（バルトとブルンナーの自然神学論争）
・トマス研究、ジルソン（1932）：主知主義・合理主義という文脈で

２．波多野宗教哲学における方法論的確認事項

１）宗教哲学の問題状況
　・伝統：合理主義と超自然主義の問題　→　理性宗教と実定宗教の対立図式
　・近現代：現代宗教学、実証主義の問題　→　事実とは何か、事実と意味
２）近代哲学の文脈における宗教哲学、その変貌
　宗教と哲学　→　経験・事実と普遍妥当性・知

・実定性（生・経験）：キリスト教、多様性
・知の動態（価値・意味）：体系と方法
→　宗教体験の自己理解（自らの経験に納得する）

3）「高次の実在論」(『宗教哲学』)
象徴論、宗教経験（超越性と他者性　→　人格と愛)、批判的実在論

4）哲学的人間学：自然、文化、宗教という図式

3．波多野宗教哲学の構造

1）本質論（神ではなく宗教）←→自然主義・実証主義あるいは合理主義・超自然主義
類型論、認識のプロセス (歴史的事実・経験の多様性・個別性　→　類型　→　本質)
人間学　→　経験の意味構造　→　生における宗教の位置
体験自体が有する意味構造　→　表現、知の動態（→　形而上学)
↓　　cf. 形式（文化）と内実（根拠）

2）宗教哲学の三つの基本的な問い
（宗教基礎論。芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994）

・宗教本質論：宗教とは何か
カント的な転換、合理主義・主知主義批判、人間学

・宗教批判：なぜ宗教か
・宗教が可能性にとどまるケース、宗教としての意識されない
気分としての無神性、世俗主義、無関心
・宗教のゆがんだ逸脱・他律性への批判
↓
なぜ、宗教か　→ 人間学による宗教の意義の解明

・多元性：どの宗教なのか
宗教現象学（宗教学)、宗教現象の多様性、しかし単なるカオスではない
↓
類型論の方法論的再検討。あるいは日本・アジアの宗教状況を視野に入れる。

４．　むすび――――展望

1．波多野宗教哲学の批判的継承＝現代における宗教哲学の可能性
・宗教研究基礎論としての宗教哲学／宗教基礎論としての宗教哲学
・批判的実在論（高次の実在論＝第二度の実在論)、ティリッヒ、ヒック
・象徴論の精密化：解釈学、言語哲学、宗教言語論・隠喩論　　cf. カッシーラー
宗教的経験を意味と力の観点から論じる→実証的な宗教研究(人類学的宗教研究)との提携

2．キリスト教学とは何か、キリスト教学にとっての宗教哲学の意義

＜文献＞

1．『波多野精一全集』全六巻、岩波書店、1969年。
2．論集
石原謙編『哲学及び宗教と其歴史――波多野精一先生献呈論文集』岩波書店。
石原謙・田中美知太郎・片山正直・松村克己
『宗教と哲学の根本にあるもの――波多野精一博士の学業について』岩波書店。
『追憶の波多野精一先生』玉川大学出版部。
京都哲学会『哲学研究』第 406 号（波多野精一博士追悼号)。

３．研究書
浜田与助『波多野宗教哲学』玉川大学出版部。
宮本武之助『人と思想シリーズ　波多野精一』日本基督教団出版部。
『宮本武之助著作集　上下』新教出版社。
側瀬　登『時間と対話的原理――波多野精一とマルチン・ブーバー』晃洋書房。
４．思想史の中の波多野
古屋安雄他　『日本神学史』ヨルダン社。
石田慶和　『日本の宗教哲学』創文社。
５．研究論文
安藤恵崇「時と永遠への思索――波多野精一」、藤田正勝編『日本近代思想を学ぶ人のために』世界思想社、1997 年、118-135 頁。
片柳栄一「時と永遠――波多野精一」、常俊宗三郎編『日本の哲学を学ぶ人のために』世界思想社、1998 年、257-286 頁。
原口尚彰「日本新約聖書学史における波多野精一」、『キリスト教史学』（キリスト教史学会）第 60 集、2006 年、87-102 頁。
村松晋「波多野精一と敗戦」、『聖学院大学論叢』第 19 巻第 1 号、2006 年、63-72 頁。
「波多野精一の時代認識」、『聖学院大学論叢』第 19 巻第 2 号、2007 年、140-146 頁。
鵜沼裕子「日本キリスト教史における「他者」理解をめぐって　波多野精一の場合」、『聖学院大学総合研究所紀要』第 41 号、2007 年、132-160 頁。
佐藤啓介「愛ゆえに、我在り――田辺、波多野、マリオンと存在－愛－論」、片柳栄一編『ディアロゴス――手探りの中の対話』晃洋書房、2007 年、216-236 頁。
「波多野精一の存在－愛－論」、『日本の神学』46、2007 年、31-52 頁。
「神の言葉の器としての人間――波多野精一の象徴論の存在論的再解釈をめざして」、『聖学院大学論叢』第 22 巻第 1 号、2009 年、181-189 頁。